

## 「表現」と「沈黙」

——ホーソン「灰色の戦士」の一解釈——

岩 田 強

従来のホーソン研究においては、だれもが言及するその父方の家系（ホーソン家）と比較すると、母方の家系（マニング家）の方は不当に等閑視されてきたという感が深い。マニング家についての初めての包括的な研究（Glenn C. Erlich, *Family Themes and Hawthorne's Fiction: The Tenacious Web*. Rutgers）がようやく一九八四年になって公刊されたという事実も、こうしたマニング家軽視の風潮の必然的な結果と見ることができよう。このエールリッヒの研究によって、わたしたちは、養家先のマニング家がホーソンの精神形成に及ぼした影響についての基本的な視座を与えられたが、マニング家がホーソンの文学全体に対して持つ意味の研究はまだその端緒にいたばかりと言ってよく、そのような観点からの個々の作品の解明は今後の研究に俟たねばならない。そして、これから扱おうとする「灰色の戦士」（一八三五年）は、「マニング家」という視軸の挿入が従前とは全く異なる解釈の可能性を示唆するという点で、とくに興味ぶかい作品であるように思える。

この作品はホーソンがニューイングランドの歴史に取材して書いた所謂「歴史物語」のなかの一篇で、一六六九年四月にボストンで起きた市民蜂起を背景に使っている。一六三〇年の入植当初からマサチューセッツ湾植民地は、ニューイングランド参議会を介して英国王から得た特許状によって、大幅な自治権が与えられていた。毎年開催される総会ジェネラル・コートにおいて総督、副総督、参議が植民地人の間で互選され、立法・行政・司法の三権も実質的には植民地

人の手に委ねられていた。

その後、クロムウェルたち「<sup>ラフド・ハウス</sup>円頂党」が英本国を支配していた一六四〇年から一六六〇年までの二〇年間、アメリカにおけるイギリス植民地は放任の状態におかれ、自治の内実はさらに拡充された。「われわれの忠誠は、イギリスに居住しなくなったのちまでわれわれを縛るものではない。イギリス議会の法律はイギリス国外に及ぶものではなく、また国璽を印した王の令状もイギリス国外に及ぶものではないからだ」というマサチューセツ湾植民地の出した声明は植民地人の独立の気概をよく示している。

だが、英本国で護民官政治が崩壊し、一六六〇年にチャールズ二世が復位して王政復古の反動期に入ると、この植民地の自由は受難の時代を迎える。英国王とその政府は、植民地から上る経済利益を確実に本国に吸収しようとして、貿易法の遵守を強要し、その効果があがらないのを知ると、植民地の自治権の根拠である特許状の撤回を画策する。こうした趨勢のなかで、一六八四年チャールズ二世はマサチューセツ湾植民地を含む全ニューイングランド植民地の特許を取り消し、翌々年の一六八六年には、チャールズ二世の継承者であるジェームズ二世が、勅任総督としてエドモンド・アンドロスをボストンに送りこんでくる。アンドロスの統治は、必然的に、植民地の自治権を制限したり剥奪したりするという方向をとった。「エドモンド・アンドロス卿の施政は暴政につきものの特色をほとんどなにひとつ欠いていなかった。総督と参議は国王から職務を与えられて土地からはまったく孤立しており、直接であれ代表者を通じてであれ人民の同意を得ることなく法律が制定され税が課せられ、私民の諸権利は蹂躪され、すべての地所の権利書は無効を宣せられた」(IX、九)<sup>二</sup>のである。

こうしたアンドロスの為政はとうぜん植民地人の憤激をかった。ボストンの市民たちは、二年の間不満を抑えていたが、オレンヂ公ウィリアムによってジェームズ二世が王位を追われた所謂「名誉革命」の噂が植民地に伝ってきたのをきっかけに、一勢に蹶起して、アンドロスとその主だった支持者約五〇名を投獄する。以上がこの作品の背景をなす一六八九年四月のボストン反乱のあらましである。

十頁足らずのこの小品はいま紹介した歴史背景を扱う導入部とひとつの場面と結語だけで構成されており、作品

の本体をなすその場面は、ボストン市民が蹶起する前日の夕暮の、ボストンの路上に設定されている。アンドロスが部下のエドワード・ランドルフ、ジョゼフ・ダドリー、ブリバント博士や、会衆派の支配する土地に国教会を浸透させるため本国から送りこまれてきた国教会の牧師を率い、傭兵隊に前後を守られてキング・ストリートに登場し、集ってきたボストンの市民たちと対峙する。やがて、一触即発の緊張がみなぎる両者のあいだの無人の空間に、最初期のピューリタンの装束と物腰を帯びた白髪のひとりの老人がどこからともなく出現する。だが、市民たちのなかにはだれひとりその老人を見知る者がいない。老人が威厳のある戦士の態度で、アンドロスに向かい「あすお前は打倒され投獄されるのだ」と予言すると、アンドロスは老人に威圧されたかのように兵を引きあげ、老人もいずともなく姿を消す。

この△灰色の戦士▽と呼ばれる謎めいた人物を創出するのにホーソンが「ハドリーの天使」伝説を利用したということは、G・ハリソン・オリアンズの指摘以来定説になっている。<sup>三</sup>「ハドリーの天使」というのは、トマス・ハッチンズンがその『マサチューセッツ史』（一七六五年<sup>四</sup>）のなかに採録している、史実を核としたニューイングランド地方の伝承で、次のような内容である。「一六四九年にチャールズ一世に死刑を宣告した所謂弑逆裁判官たちは一六六〇年の王政復古によって身の危険を感じ、その内の三名がひそかにアメリカに逃れ、マサチューセッツのハドリーに潜伏したが、三人はラッセル牧師の家にかくまわれていて、町民はそのことを知らなかった。一六七五年、対インディアン戦争（フィリップ王戦争）がニューイングランド全土に広がり、ハドリーもインディアンの奇襲を受けた。礼拝式の最中だった町民は大混乱に陥ったが、その時、物腰も衣服も他の住民とは異なる威厳のあるひとりの老人が現われ、町民を指揮してインディアンたちを撃退したのち、いずともなく姿を消した。老人の正体を知らない町民たちは、彼が神から遣わされた天使ではなかったかと噂しあったが、ラッセル牧師の没後、弑逆裁判官が隠棲していたことが明るみに出て、老人の正体について別の推測が行なわれるようになった」オリアンズは、この伝承が十九世紀になって、ウォルター・スコット（『ピークのペヴェリル』一八二二年）、ジェイムズ・マッキンリー（『森の亡霊』一八二三年）、ジェイムズ・N・バーカー（『迷信』一八二六年）、フェニモア・クーパー

（『ウィッシュトンウィッシュの嘆き』一八二九年）らによって扱われ、それらの先行作品がホーソンの「灰色の戦士」（一八三五年）に影響を与えたことを詳細に立証している。

オリアンズの見解には説得力がある。「灰色の戦士」と「ハドリーの天使」を比較すれば、両者の類似は一目瞭然だろう。ホーソンがこの伝説を知っていたことについては、一八二八年のニューヘイヴンへの旅行の途中、「判事の洞穴」と伝えられる史蹟を大金を払って見物し、「アメリカのインチキだ。地面には猫一匹を葬れるほどの穴もなかった」と毒づいたという同行者の証言も残されている。<sup>五</sup>歴史上の弑逆裁判官は、それ自体、ピューリタニズムと反王制という二つの側面を兼ね備えた存在だった訳だが、それらはまたホーソン家の初代ウィリアムと二代ジョンの体現した二側面でもあった。アンドロスの腹心の部下として作中にも登場するエドワード・ランドルフは、「国王の召喚を拒否した反逆者であるにもかかわらず、治安判事の職に留まっている」として、初代ウィリアムを名指しで弾劾する報告をチャールズ二世に寄せている。<sup>六</sup>（序までに触れると、ランドルフは、植民地の情勢を査察するため本国から派遣されたいわばスパイだったのであり、彼の報告に基いて多くの植民地人が告発を受けた。作中コットン・マザーが彼を「いまいまいしい卑劣漢」（IX、十三）と呼んでいるのはそのような事情による）また二代ジョンは、ジョゼフ・B・フェルトの『セイラム年代記』<sup>七</sup>に拠れば、アンドロス政権の崩壊後ニューイングランド植民地の統治を引き継いだ安全評議会の一員だったのであり、整然と計画的に行われたボストン蜂起の画策者のひとりと目されているのである。ホーソンが、それら直系の祖先をも含め、十七世紀植民地人の置かれていた思想的状況の象徴させうる恰好の人物像を、ハドリーの弑逆裁判官という伝説的人物のなかに発見し、英本国にたいする植民地の反抗という主題を際立たせるため、インディアンとハドリー住民の抗争を、アンドロスとボストン市民の抗争に置きかえたというのは、いかにも説得力のある推定だし、作品の締めくくり方もその推定を支持しているように見える。ホーソンは作品最後のパラグラフを「灰色の戦士」の素姓の詮索にあて、次のように書いている。

そして、あの△灰色の戦士▽はだれだったのだろうか？もしかしたら、彼の名前は、その時代としてはけたはずれだったが、君主にたいしては高慢の鼻をへし折る教訓として、また臣民にたいしては崇高な手本として、後の世にいつまでも輝くひとつの判決をくだしたあの敵しい法廷の記録のなかに見いだされるかもしれない。私の聞いたところでは、ピューリタンの子孫たちが祖父の精神を示そうとする時にはいつも、あの老人がふたたび姿を現わすということだ。八十年が過ぎ去った時、彼はもう一度キング・ストリートを歩いた。それから五年たったある四月の朝の薄明のなか、いまでは粘板岩の厚板をうめこんだ花崗岩の方尖塔が独立革命の最初の戦役者を顕彰している、レキシントンの教会堂のかたわらの共有草地のうえに、彼は立っていた。そして私たちの祖先たちがバンカー・ヒルに胸壁を築こうと骨折っていた時、あの老戦士はその夜のあいだじゅう巡回してまわっていた。彼がふたたび現われるまでに、長い長い年月がたっているように、彼が現われる時は暗黒と逆境と危機の時なのだ。だが、万一、国内の暴政が私たちを圧迫したり、侵略者の足が私たちの国土を汚すようなことがあれば、△灰色の戦士▽のまたも現われんことを。なぜなら、彼はニューイングランドが相繼してきた精神の典型であり、危機の前夜における影のごとき彼の行進が、この先いつまでも、ニューイングランドの息子たちが彼等の祖先を擁護するという誓いとなるはずなのだから。

(IX、十七―十八) 引用一

ホーソン一流の迂言法で書かれてはいるが、史実や「ハドリーの天使」を参照し、オリアンズに基づいて考えれば、この一節は次のように解釈できる。すなわち、引用冒頭の「君主」と「あの敵しい法廷」は、それぞれ、チャールズ一世と、一六四九年に英本国の残部議会内に臨時に設置された高等法院 the High Court of Justice を指しており、その法廷が君主に下した高慢の鼻を折るような「ひとつの判決」とは、チャールズ一世への死刑宣告を指しているとの解釈することができる。その場合、その法廷の記録のなかに名前が残っているかもしれないという表現は、△灰色の戦士▽が、その判決文書に署名した弑逆裁判官のひとりであったことを暗示していると読むことができるだろう。ただ、ホーソンは、引用の中間部で、△灰色の戦士▽をボストン「虐殺」事件（一八七〇年）やレキシントンやバンカー・ヒルの戦闘（一八七五年）に登場させることによって、△灰色の戦士▽を伝承どおりの「ハドリーの天使」から、植民地の「暗黒と逆境と危機の時」には常に出現する救国者の象徴へと変容させている。こうしたことを踏まえ、また、ボストン烽起（一六八九年）当時の市民がだれひとり△灰色の戦士▽の正体を知らず、

彼が最年長のサイモン・ブラッドストリート（一六〇三—一九七）よりさらに年嵩に見えたという表現（IX、十七）をも勘考して結論すれば、△灰色の戦士▽は、ウィンズロップやブラッドストリートたちとともに一六三〇年代のはじめに入植してきた人々が体現していた最初期のピューリタン精神と、英国の支配から脱却しようとする植民地人の独立精神を具現しており、筋の運びや結語の誓いの口調から見て、ホーソンがその二つの精神を擁護する立場でこの作品を書いていると考えることができるだろう。

私の見たかぎりでは、この作品に関しては、以上のような解釈がこれまで主流をなしてきた。この類の解釈は、この作品を、英本国対植民地、王党派対議会派、<sup>エングリッシュ・ディセンダー</sup>国教徒対非国教徒といった集団と集団の対立抗争を扱った作品と見なし、△灰色の戦士▽を宗教的政治的独立にまつわる植民地人の共同幻想の表象と解釈するという点で共通している。たとえば、フランク・ダブルデイはオリアンズの見解の上に立ち、この作品の愛国的な性格を強調する。彼に拠れば、政治的独立から半世紀たち、アメリカの「知的独立宣言」<sup>ハ</sup>たるエマソンの「アメリカの学者」（一八三七年）を目睫の間にしていた一八二、三〇年代のアメリカには、自国の文化的自立を称揚するような作品を待望する文学論が輩出し、ホーソンもそうした気運にのってこの作品を書いたことになる。<sup>九</sup>一方、ケネス・ドーバーは、「そこ（キング・ストリート―筆者注）にはまたフィリップ王戦争の古強者もいたが、彼等は国じゅうの信心ぶかい人々の祈りに助けられて、村々を焼き払い、老若を問わず殺戮したのだった」（IX、十一）といった表現に着目して、ピューリタンを見るホーソンの眼の辛辣さを指摘する。<sup>十</sup>両者の見解は、一見したところ両極端にかけ離れているように見えるかもしれないが、この作品が集団を扱った公的な色彩の濃いものだ点では同じ土俵に立っている。たしかにこの作品の主調音がそうした公的な側面に置かれていることは間違いないし、そのような先行の解釈を完全に無視することはできないだろう。だが、すべての文学作品は主調音ばかりでなく、その主調音にさまざまな倍音が絡まりつittedコンゴロマリットとして私たちの前に置かれているのであって、たとえばすかなものでもそうした倍音を無視すれば、作品は別の曲想を響かせることになる。従来の解釈は、主調音に気をとられるあまり、かすかな倍音を聴き洩してきたのではないだろうか。作品を明瞭な意味に還元しすぎてきたのではないだろうか。た

たとえば、すでに引照した末尾の部分（引用一）において、ホーソンはなぜチャールズ一世と書かずに「君主」と書いたのか、なぜ一六四九年に設置された臨時高等法院と書かずに「あの厳しい法廷」と書いたのか、また、灰色の戦士<sup>△</sup>は弑逆裁判官のひとりだったと直言せずに「その名前がああ厳しい法廷の記録のなかに見いだされるかもしれない」という迂遠な書きかたをしたのだろうか。隠されているものに明確な名称を与えようとする従来の解釈では、この文体の曖昧さは素通りされ、なぜホーソンがそのような文体を必要としたかという問題は解かれぬまま残る他ないが、私の考えでは、この文体の曖昧さなかに、ホーソンを駆りたててこの作品の創造に赴かしめた根源的な動機——「マニング家」という動機——が隠されているように思えるのだ。

マニング家の一族のうち最初にアメリカに渡ってきた人間がニコラス・マニング（一六四四—一七二一？）<sup>△</sup>と言いつ、この人物が妹二人とのあいだで近親相姦事件を引きおこしたことはよく知られているが、ヴァーノン・ロギンスやフィリップ・ヤングを読むと、このニコラス・マニングがボストンの烽火事件ともふかく関っていたことが分かる。<sup>十一</sup>ここで、ニコラスの閲歴のうち、「灰色の戦士」と関連のあるものを拾いだしてみよう。

一六六二年 英国のダートマスから十八歳で單身渡米、セイラムに入植する。「神の選良」と認定され教会員資格を得る。やがて町行政委員<sup>セントマン</sup>に選ばれ、ウィリアム・ホーソンらとともに町政に参画し、またホーソン家の隣りの地所を購入して住みつく。つまり、ニコラス・マニングとウィリアム・ホーソンとは同僚でもあり、隣り同士でもあるという間柄だった。またホーソン家の二代ジョン（一六四一—一七一七）とはほぼ同世代である。

一六六三年 十九歳でセイラムのエリザベス・グレイ（Elizabeth Gray）と結婚する。エリザベスは再婚で、十二歳になる長男をはじめ数人の連れ子があり、ニコラスとの結婚当時三十歳を越していたと思われる。

一六八〇年 前年英国から呼び寄せた妹二人との近親相姦が、妻エリザベスの訴えで暴露され、裁判を逃れるためセイラムから逃亡する。妹二人は裁判で有罪の判決を受ける。

一六八六年 アンドロスの支持者として現在のメイン州で判事職につく。

一六八九年 ポストン市民の蜂起でアンドロス政権が崩壊した時、アンドロスの支持者として逮捕され、ポストンに連行される。ハッチンソンが「(一六八九年) 四月十八日(木)、この日、総督と、参議のうちのもっとも活動的だった者たち、またその他の胸糞のわるくなるような人々、総勢約五十名が、捕えられ監禁された」と書いて<sup>十二</sup>いる人々のうちにニコラス・マニングも入っていたことになる。もっともニコラスは、裁判で、これまで植民地に尽してきた自己の貢献を申し立て、のちに釈放されている。九年前の近親相姦罪が審理された形跡はない。

ロギンスやヤングが確信しているように、ホーソンがニコラス・マニングのこうした経歴を知っていたとすれば、ニコラスがホーソンの眼にどのような人物として映ったかはほぼ推察できるだろう。まず第一に、近親相姦の経緯から考えて、ニコラスは性道德からの途方もない逸脱者に見えたはずである。もっとも、おそらくホーソンには、ニコラスのことを一族の中の例外的な逸<sup>はな</sup>れ者として簡単に切り捨てることはできなかったのではないだろうか。というのも、ホーソン自身、自分の中に妹や姉への近親相姦的感情があることを自覚し、そのことで懊悩していたと思われ<sup>十三</sup>るからで、そうしたホーソンにとって、ニコラスは、自らその轍を踏んでしまいかもしれない同類の先達として、嫌悪と共感を二つながら感じざるをえない存在だったのではないかと思われるからである。

ところで、ニューイングランド史に親炙していたホーソンには、政治上の裏切り者というニコラスの側面もよく見えていたはずである。すでに説明したポストン蜂起事件の歴史背景からも推察されるだろうが、マサチューセッツ湾植民地人にとって、アンドロス一派は「憎みきれない宿敵」(IX、十二)だった。ウィリアム・ホーソンが国王の召喚を拒否したり、ジョン・ホーソンが市民の蜂起を策動できたのも、そのような反国王、反アンドロスの世論に支えられていたはずである。ところで、ニコラス・マニングは一時ウィリアム・ホーソンの密<sup>インフォーマント</sup>偵<sup>十四</sup>として働いたこともあり、また同僚として町行政委員を勤めたこともあるのだから、セイラム時代のニコラスの政治的立場がそうした世論の趨勢と対立するものだったとは考えにくい。だとすると、そのニコラスがアンドロスを支持するようになったということは、以前の立場から百八十度転換し、かつての仲間たちを裏切ったということに他ならない。



ホーソン家とマニング家の相方の血をひく作家ホーソンにとって、性道德の逸脱者であった母方の端緒が、政治的にも裏切り者として、父方の端緒と敵対しあったということは、それだけでも衝激的な事実であっただろうが、史実と校合してみると、両家の関係は「現実には小説よりも奇なり」という言い古された表現を使いたくなるほど露骨でどぎつい形をとっていたことが分かる。

すでに触れたことだが、一六八〇年に近親相姦が明るみに出たとき、ニコラスは逃亡したが、二人の妹はイブスウィッチの四季法廷に出頭し有罪の判決を受けた。この時ウィリアム・ホーソンは八三歳の高齢ながらまだ存命していた。周知のようにウィリアムは大きな影響力をもつ有力者であり、また判事をも勤めていた。ロギンスによれば、ウィリアムが主管した最後の法廷は一六八〇年三月のエセックス郡法廷だということで、マニングの近親相姦事件（一六八一年三月結審）をウィリアムが直接審理した訳ではなかったが、イブスウィッチ法廷の判事たちは「ホーソン少佐のかつての同僚四人」<sup>十五</sup>だったのだから、間接的にはウィリアムがニコラスの妹たちを裁いたと言えないこともない。

父方の家系が母方の家系を裁くというこの構図は、一六八九年にアンドロス政権が崩壊した時、もっと直接的な形で再現された。ジョン・ホーソンが、市民躍起の陰の策動者のひとりとして、また政権を継承した安全評議会<sup>カウンシル・オブ・セイフティ</sup>の一員として、この事件に関与したことはすでに述べたが、ジョンはこれ以外の資格でもこの事件と係っている。当時の植民地の裁判では、判事団は議会の参議<sup>アレスメント</sup>によって構成されていたが、烽起事件当事のセイラム選出の参議は、十年余り後の魔女裁判の頃と同じくジョナサン・コーウィンとジョン・ホーソンだったのである。<sup>十六</sup>つまり、今度の場合には、青年時代から隣同士としてよく知りあっていたはずのジョンとニコラスが、判事席と被告席に分れて相対し、「ホーソン家」が「マニング家」を直接裁くという構図が出来上ったのである。

自分の父方の祖先と母方の祖先がこのようにも劇的な対照を見せて縋れあっているという人間は数ないだろうが、作家ホーソンはそういうたぐい稀れな人間のひとりだったのであり、その強烈な対照がホーソンの意識に焼きついていなかったとは考えにくい。ホーソンはウィリアム・ホーソンについて「その姿は、思い出せるかぎりの昔から、

少年の私の想像のなかにあった。それは今でも私につきまとい、過去にたいする一種の郷愁を誘う<sup>十七</sup>と書いているが、ウィリアムと分かちがたく絡みあっていたニコラス・マニングについては何も言及していない。ニコラスに限らず、マニング家の過去については、作品ばかりでなく日記や書簡でもなにひとつ書いていないのである。ホーソンがニコラスのことを知っていたという前提で考えれば、そこには徹底した抑圧が働いていたと見做す他ないだろう。

この完全な黙秘という結果から逆算すると、ホーソンにとって「マニング家」という主題はよほど扱いにくい、あるいは危険な主題だったことになるが、それはなぜだろうか。たとえ血族であるにしても、百五十年まえの過去の人物の犯罪や行動が、百五十年後の人間にそれほどの重圧を与えるということがあるだろうか。私たちの常識はそれを肯定しないだろう。なにかもっと即自的な理由があったのではないだろうか。ニコラスの近親相姦がホーソンの内なる「近親相姦」を刺激して、逃避機制を作動させたのだろうか。あるいはエールリッヒが豊富な資料を駆使して立証しているように、父の死後幼児期から三〇歳を過ぎるころまで、直接間接にホーソン家の母子を扶養してくれたマニング家の人々（とくに叔父ロバート・マニング）にたいして、ホーソンの中に解きがたい複合感情<sup>コンプレックス</sup>が形成されていて、それがホーソンに「マニング家」という主題全体を忌避させたのか。おそらく、それらすべての絡まりあった全体が、ホーソンの意識と無意識の奥ふかくまで喰いこんでいたと考えるのが最も妥当であろう。だが、原因を明確に特定できないにしても、ホーソンの心理のなかに、「ホーソン家」と「マニング家」を二つに分極し、「ホーソン家」は「表現」に登場せしめうるが、「マニング家」は「沈黙」のなかに抑圧せざるをえないという機制が存在していたと考えることはできるだろう。そう考えなければ、両家にたいするホーソンの扱いがこれほどかけ隔っていることを説明できないからだ。

以上に述べたような事実と理解に立って「灰色の戦士」を読み直してみると、ホーソンが、キング・ストリートでのボストン市民とアンドロス一派の対決の場面を描きながら、市民の群れのなかにジョン・ホーソンを、また、アンドロス一派の隊列のなかにニコラス・マニングを、姿なくたち交らせていなかったとは考えがたい。もちろん

ホーソンは、ジョンやニコラスを念頭に置いているということをはっきり書いてはいない。だが、ホーソンが、「表現」上では二つの集団の対立抗争を描きながら、「沈黙」の次元では、自己の内部の「ホーソン家」と「マニング家」の葛藤をひそかに扱っていると考えたならばうまく平仄の合う箇所がいくつか見出されるのである。「沈黙」を解説するという作業なので、牽強附会や深読みの危険がつきまとうが、予断に立ったその解釈が全体としての程度の整合性を示すかということは確認しておくだけの価値があるだろう。

この作品は、歴史的背景を説明した冒頭二節と、△灰色の戦士▽の行方と素姓を穿鑿する末尾の二節が、ポストン市民とアンドロス一派の対峙の場面を前後から挟むように構成されている。喩えてみれば、この作品は、前後の四節を額縁とし、中間の場面を絵とする「額縁のなかの絵」の構造を持っていると言えるが、その額縁の部分と絵の部分の表現上に、微妙な相違が見られる。その相違というのは、絵の部分に比して額縁の部分に、親子関係や血脉にかかわる言葉がめだって多く用いられている、ということだ。「三年の間、私たちの祖先は、その長が議会であれ、護民官であれ、カトリック教徒の君主であれ、母国への忠誠心を変えることなく支えてきたあの子としての愛情によって、不機嫌ながら服従してきた」For two years, our ancestors were kept in sullen submission, by that filial love which had invariably secured their allegiance to the mother country, whether its head chanced to be a Parliament, Protector, or popish Monarch. (IX' 九) (傍点、イタリックス、筆者。以下同様)。「私たちの父親たちがバンカー・ヒルに胸壁を築こうと骨折っていたとき」when our fathers were toiling at the breast-work on Banker's Hill (IX' 十八)、「ニューイングランドが相続してきた精神」New-England's hereditary spirit (IX' 十八)、「ニューイングランドの息子たちが彼等の祖先を擁護する」New-England's sons will vindicate their ancestry (IX' 十八)、これらの表現はすべて額縁の部分に集中しているのである。

もっとも、絵の部分にも同種の表現がないわけではない。それは△灰色の戦士▽が出現して、人々がその正体を尋ねあう場面に出てくる。「『あの年老いた長老はだれなんですか』と若者たちは父親に尋ねた」“Who is this

gray patriarch?" asked the young of their sires. (IX, 十四) だが、見ているとおり、この部分では、fathers と sons ではなく、古語であるために肉感性の乏しい sires と、親子関係を指示しない the young が用いられ、また、「太祖」「部族長」といった公的な色彩のつよい語義を併せもつ patriarch が用いられており、それらは、同種の表現であるためかえって、額縁の部分との相違を際立たせている。親子関係や血脈を表わすこの種の表現は、私の考えでは、英本国と植民地の対立といった公的な色彩のつよい題材に、ホーソン個人の家系に関する私的な問題をひそかにまといつかせる役割を果している。

ところで、この種の表現のうちとくに注目すべきものは、チャールズ二世とジェームズ二世を作中に登場させる「好色王チャールズ」の偏狭な継承者「ジェームズ二世」James II., the bigoted successor of Charles the Voluptuous (IX, 九) という冒頭の表現だろう。この物語はジェームズ二世の治世下の事件を扱っていて、わざわざチャールズ二世を持ちだす必要性はなく、その証拠にチャールズ二世はこの箇所一度名を挙げられるだけで、以後の展開には一切登場しない。また、チャールズ二世に言及するにしても、政治的宗教的対立の物語のなかで、その私生活上の放縦を強調する「好色王チャールズ」という呼称を用いなければならぬ必然性は感じられない。おそらくすべての読者がこの「好色王チャールズ」という表現に脈絡の悪さを感じるのはないだろうか。だが、ホーソンが、その「沈黙」のなかで、英国王とその手先であるアンドロス一派の背後にニコラス・マニングを潜ませているらしいということに想到すれば、脈絡の悪さの印象は氷解するだろう。十九歳の若さで結婚し、「神にたいする罪」となるような性行為を妻に要求し、使用人を手籠めにしようとして拒絶され、ついに妹たちとの近親相姦に走るニコラス・マニングは好色と呼ぶ他ない人間だった。この「好色王チャールズ」という表現には、ホーソンの「沈黙」のなかに隠れているニコラスが、ちらりと顔をのぞかせたという印象がある。

さて、次に検討したいことは、ボストンの市民たちがだれ一人／＼灰色の戦士Vの正体を知らないという点である。従来の解釈に従えば、この設定は、ピリグリム・ファーザーズが渡って来てからの六十年余の間にピューリタン社会が変質し、初期の理想が忘れ去られたことにたいするホーソンの批判を反映している、ということになる。<sup>二〇</sup>だが、

ホーソンの他の作品を参照してみると、ここにももっと私的な問題が絡みついているように思えてくる。

ピューリタン社会の変質という問題は、「灰色の戦士」ではきわめて曖昧かつ象徴的にしか扱われていないが、「プリバント博士」<sup>二十一</sup>（一八二八年または二九年）を読むと、ホーソンがこの問題に関して透徹した理解を持っていたことが分かる。その作品のなかでホーソンは、社会を変質させた原因を、社会に内在していた原因と、外部からやって来た原因に分けて説明しているが、前者は、世代交代に伴って必然的に生じた信仰上の弛みを指している。すなわち、迫害を逃れて英国から渡ってきた初代の移住民たちは、成年に達したのち自らの意志でピューリタニズムを選んだ人々で、そのため自己の信仰に強い確信を抱いていたが、それにたいして、植民地で生まれた二代目は「自らの想像力と理解力を自由に働かせたというより、拘束されて」<sup>二十二</sup>ピューリタニズムを受け入れた人々であり、そのため先代ほどの信仰心を持ちえなかった。このため、初代が高齢に達し、死んでいくにつれて、信仰の弛みが生じた、とホーソンは書いている。

次に、ホーソンは、世代交代によって生じたこの変質が、外部から流入して来た新移住者たちによって、さらに加速された、と書いている。まず、「植民地の経済的重要性が増したことによって」<sup>二十三</sup>利益を目的とする世俗的な入植者が流れこみ、続いて、英国の国権が及びにくいことにつけて、西インド諸島やカリブ海沿岸の海賊、国事犯、私的な重罪人たちが流れこみ、その結果、

社会は、はっきりと一線を画する訳にはいかないが、あきらかに毛色のちがった二つの集団に編成された。一方の集団には、初代入植者のわずかな弱々しい生き残り、彼等のすぐ次の世代の多くの者、聖職者の全体、そして、陰気な気質か、敏感な良心か、臆病な思想のために、父親たちの厳格さを保持してきた人々のすべて、が含まれていた。他方の集団は、新しい移住者、陽気で思慮のあさい原住民、国教会の支持者、そして思想的に啓蒙された自由人と、国内の悪人や無節操な投機師との雑多な寄せ集めから成り立っていた。<sup>二十四</sup>（引用二）

聖職者と行政上層は、こうした初期の社会の解体を食い止めるために、一六七九年に宗教会議を開いて対策を打ち出し、綱紀の肅正に努めた。

だが、住民数の増加、住民の精神の変質、ある程度までなら不正を行なってもかまわないというもつともな分別のために、その異端審問風な厳格さを実行に移すことは、もはやできなかった。それまでは、そうした厳格さが人々の<sup>二十</sup>垣端まで入りこみ、私的な不法行為と社会を危うくする犯罪との別なく、人々の家庭生活を見張ってくれたものだったのだ。<sup>二十五</sup>（引用

三)

歴史的に見れば、二代目のピューリタンに信仰の弛みが生じたというホーソンの指摘は、半途契約の問題にかかわっている。周知のように、初代の移住者たちは「視える聖者」のみで教会を構成するため厳格な資格審査を行っていたが、やがて、「視える聖者」とは認定されていない次代の子供たちをどう扱うかという問題に直面し、教員資格を緩める決定を行なった。それが一六六二年の半途契約の採用である。

ところで、ホーソンの家系にとって、半途契約が決定された一六六二年と、宗教会議が召集された一六七九年という年は特別の意味を持っている。つまり、一六六二年はニコラス・マニングが単身渡米してきた年であり、一六七九年はニコラスが母親、二人の妹、三人の弟を英国から呼びよせ、その妹二人と近親相姦の関係に入った年なのである。マニング家のアメリカにおける直系の始祖はこの三人の弟のうちのトマスであり、したがって、一六七九年という年はマニング家のアメリカ第一年と言ってよい。母方の家系にとって記念すべきこれら二つの年号が、植民地にとって重要な事件のあった二つの年号と重なっていたということは、作家ホーソンにとって感慨深い事実であつたろう。その事実は、父方の家系ばかりでなく、母方の家系もまた植民地史という縦糸のなかにしっかりと編みこまれた緯糸だったことを示している。『トワイヌ・トゥルド・テイルズ』第二部の冒頭におかれた「知事官邸の伝説」の連作四篇は、ニコラス・マニングが加担した王党派たちの衰亡を描いた歴史絵巻といった性格の作品だ

が、その連作の舞台となるボストンの知事官邸の定礎の年としてホーソンが一六七九年を使っている（IX、二四〇）のは、故のないことではないと思われる。

こうしたことを知って引用の二と三を読むと、ホーソンの考えていたことをほぼ推測することができよう。すなわち、一六三〇年に入植してきたウィリアム・ホーソンが自らの意志でピューリタニズムを選択した初代入植者のひとりだったとすれば、一六六二年にやってきたニコラス・マニングは経済的利益を求めて渡米しはじめた世俗的な移住者のひとりだったように思える。彼が教会に迎えられたのも、半途契約の採用によって入会資格が緩められたお蔭だったのではないか。彼は新世代の申し子の如き人物で、一六七九年の彼の近親相姦事件は、「それまで人々の炉端にまで入りこみ、私的な不法行為と社会を危うくする犯罪との別なく、人々の家庭生活を見張ってくれていた」最初期のピューリタン精神が崩壊したことを象徴的に示しているのではないか。ウィリアム・ホーソン（「ホーソン家」）に初期のピューリタン精神を象徴させるとすれば、ニコラス・マニング（「マニング家」）に変質後のピューリタン社会を象徴させることができるのではないだろうか。

ボストン市民が△灰色の戦士▽の本質を見抜けないという設定は、おそらく、以上のようなホーソンの歴史認識を反映している。ホーソンの内密の意識のなかでは、おそらく、変質前の社会と変質後の社会が「ホーソン家」と「マニング家」という二つの象徴に置きかえられ、あとざく対照されていたはずで、ホーソンの「過去にたいする認識が、家族の葛藤にたいする認識を象徴的に拡大書したものに他ならなかった」<sup>二十六</sup>のは、そうした家系上の現実によってすでに定命されていたと言ってよい。

さて、このような文脈のなかに作品を置いてみると、ホーソンが「沈黙」のうちで主人公△灰色の戦士▽になにを表象させようとしていたか、かなり明瞭に推測することができてくる。引用一の冒頭の、△灰色の戦士▽の素姓を穿鑿している部分を、原文で引用しなおしてみよう。

And who was the Gray Champion? Perhaps his name might be found in the records of that stern

*Court of Justice, which passed a sentence, too mighty for the age, but glorious in all after times, for its humbling lesson to the monarch and its high example to the subject.* (イタリックス<sup>1</sup> 筆者)

すでに述べたように、従来の解釈では、引用中の *that stern Court of Justice* は一六四九年の高等法院を、*the monarch* はチャールズ一世を、そして *a sentence* はチャールズ処刑の判決を指すということになっていた。だが、この鋤を鋤とは決して呼ばない文体は、そのような解釈以外の解釈も許容する奥行きを備えているのではないだろうか。

ニコラス・マニングの近親相姦が明るみに出たのは、夫と義妹たちとの関係に気付いたニコラスの妻が、半年間悩み恐れた揚句、治安判事に訴え出たためだったが、驚くべきことに、この三百年まえの事件の関係書類(妻の起訴状、証言者の供述書、ニコラスの母親の減刑嘆願書の断片)が四季法廷記録のなかに残されていたのである。これらの書類はフィリップ・ヤングによって一九八〇年に発掘されたが、ヤングによると、ジョセフ・B・フェルトはすでに二百年まえにこの書類の存在を知っていたという。そしてフェルトは、自著『セイラム年代記』の一項目としてニコラスの妹たちが受けた裁判について名前を伏せて記載している箇所<sup>二十七</sup>で、その書類が四季法廷記録 *Quarterly Court records* のなかに見出されるという注を付しているという。この注記の表現が、「その名前は、あのきびしい法廷の記録のなかに見出されるかもしれない」というホーソンの表現に倣しているとは感じられないだろうか。両者の類似性は、ホーソンがフェルトの示唆に従って裁判記録を検索したことのひとつの証拠のように私には感ぜられる。ここで、ホーソンがこの事件の詳細を裁判記録によって知っていたと想定してみると、いま検討している箇所からは次のような裏の解釈が生まれてくる。

すなわち、*the monarch* という単語は、家庭内の「専制的支配者」だったニコラス・マニングのことを指し、*the subject* はその暴君によって虐げられていた「被支配者」たるニコラスの妻を指し、*that stern Court of Justice* は植民地の四季法廷を指している。したがって、その法廷の下した *a sentence* とは、近親相姦を事実と



断定してニコラスを「恥入らせ」、妹二人に晒し者の刑を命じた判決のことであり、また、行方を晦したニコラスとの離婚を申請した妻にたいして、その離婚を認め、セイラムにあたったニコラスの家作の権利を妻に与えた判決を指している。この読み方によれば、△灰色の戦士▽は、当然、この事件を審理したイプスウィッチ法廷の判事たちを指すことになるが、すでに指摘しておいたとおり、それら判事たちは「ホーソン少佐のかつての同僚の四人」だったのであり、ウィリアムと精神を同じくする人々だったと見てよい。「沈黙」のなかのホーソンの象徴体系からすれば、△灰色の戦士▽はこの四人の判事の精神の具現であり、それは同時に「ホーソン家」のそれに通底するものだったはずである。ここで私たちは、作品の題名「The Gray Champion」の含意にも留意する必要がある。いま述べた四人の判事はニコラスの妻の擁護者の役割を果たした訳だが、すでに触れた如く、ニコラスの妻の旧姓は Elizabeth Gray なのである。この符合は、いままでの検討を踏まえれば、単なる暗合として見過すことはできないのではないだろうか。すなわち、この作品の題名には、「年老いた白髪の戦士」という公然の意味のしたに、「エリザベス・グレイをニコラスの虐待から擁護し、彼女のために戦う者」という含意が忍ばれているとは考えられないだろうか。

従来の解釈の根拠となったのと同じ文から、以上に述べたようなまったく別途の解釈が紡ぎだされ、それぞれが並行しつつ、それなりの整合性を持っているということは驚くに価するだろう。奇術めいた玉虫色の文体といつてよいが、それがホーソンの文体のひとつの特色であることは紛れもなく、次に検討する結語の部分でも、その特色は歴然と顕われている。ここでもまた単語の両義性が駆使されているので、原文で引照しなおす必要がある。

But should *domestic tyranny* oppress us, or the invader's step pollute our soil, still may the Gray Champion come; for he is the type of New-England's hereditary spirit; and his shadowy march, on the eve of danger, must ever be the pledge, that New-England's sons will vindicate their ancestry.

(イタリックス、筆者)

この部分の domestic tyranny という表現は、従来、「国内の暴政」と読まれてきたし、そのように読めることも間違いない。だが、歴史に照らして考えれば、当時植民地を怖かしていた相手は、英本国であれ、インディアンであれ、また戦争状態が断続していたフランスであれ、いずれも外部からの敵と呼ばれるべき存在だったと言っている。少なくとも作品のなかには「国内の暴政」と呼べるようなものは現われていない。それにもかかわらず、「侵略者の足」をさしおいて「国内の暴政」が最初に挙げられているのは奇妙と言えるだろう。私の考えでは、この不自然な順序の逆転には、domestic tyranny という語句から、ニコラスが妻に加えた「家庭内の虐待」をそれとなく感じとらせようという意図が籠められているように思える。つまり、作品の冒頭で、「好色王チャールズ」によってニコラスの姿を垣間見させたホーソンは、最後の一節でふたたび同じことを試みているのではないだろうか。ホーソンの意図は明らかだろう。作品の首尾にそのような微かな手懸りを埋めこむことによって、物語の裏面にニコラス・マニングが伏在していることを、それとなく読者に告げ知らせようとしているのである。そのように考えれば、「ニューイングランドの息子たちがその祖先を擁護する」という末尾の誓いにも、表裏二様の意味が重層していることに気付くはずだ。すなわち、「ニューイングランド人が受け継いできた正統ピューリタン精神と独立精神を守り抜く」という従来の解釈はいわば表側の意味であって、その裏には、「ホーソン家とマニング家という二つの旧家の未裔である自分は、いわばニューイングランドの申し子だ。自分の体には、「ホーソン家」のピューリタン精神、独立精神、迫害精神ばかりでなく、「マニング家」の好色の血も受け継がれている。自分はそのことを自覚している。だが、自分は、ニコラス・マニングを恥入らせて妻のエリザベス・グレイを擁護した「ホーソン家」の精神を継承すべく努める」というホーソンの「沈黙」の決意表明が隠されているように思えるのである。

もっとも、ホーソンの肉体と精神を戦場にして繰りひろげられた「ホーソン家」と「マニング家」の角逐が、一片の決意表明で結着がつくほどなま易しいものだったとは考えられない。ニコラス・マニングに淵源する「近親相姦」の主題が最初期から最晩年までホーソンのなかに底流していたことは、断続して書かれたその種の作品の存在が無言のうちに証言している。その様は、体内に巣食う固疾がときおり発症するかのようであり、また、「沈黙」の

なかに封じこまれた「マニング家」が、視えないながらも終熄することなく、休火山のように岩漿を滾らせ続けていたようにも見える。

ホーソンの作品を考える場合、いままで述べてきた「ホーソン家」と「マニング家」の例にかぎらず、「表現」と「沈黙」の特異な、いかに常には留意しなければならない。「灰色の戦士」がその好個の一例だが、ホーソンの作品には、「表現」されたテキストがそれ自体では自立しておらず、視えない「沈黙」を読者が補完することによって、はじめて作品の全体像が見えてくるといった印象を与える作例が数多くある。この印象が正鵠を射ているとすれば、ホーソンは表現行為というものに対して一風変わった見方をしていたということになるだろう。つまり大方の作家とは違って、ホーソンは、言うこと（「表現」）だけによって自己の表出意識が満されるとは考えず、言わないでおくこと（「沈黙」）をも自己の表現行為の一部と見做していたような形跡がある。私たちは、日常生活において、むっとおし黙ること、内心の憤懣をそれとなく相手に伝えることがあるが、そうした無言の表現法に通ずる特色がホーソンの文体には見られる。言いかえれば、ホーソンは「沈黙」に表現性を与えることにかけて独得の工夫を持っており、内容を明示しないまま黙秘の感触だけを読者に伝えることに長けていたと言ってもよい。

このことは、単に、ホーソンの文体が省略の多い文体だということを言っているのではない。ふつう、省略の多い文体というのは、「表現」されたものを通して省略されたものを透し見ることでできる文体を指す。いま、このような文体を、「表現」の直下に省略されたより大きな「沈黙」が横わっているという意味で「氷山型の文体」と呼ぶとすれば、ホーソンの文体は「氷山型」ではなく、言わば「もぐらの巣型」である。ホーソンの場合、省略された「沈黙」が「表現」からはるか離れたところに潜んでいることがよくあるからだ。極端な場合、ホーソンの「表現」は「沈黙」を透視させるどころか、それを隠蔽するようにしか働かない。「灰色の戦士」はその好例であろう。予備知識を持たずにこの作品を読む読者には、「表現」（ポストン市民とアンドロス一派の抗争）を通して、「沈黙」（ニコラス・マニングの所業や「ホーソン家」と「マニング家」の葛藤）を透し見ることはできないだろう。だが、ホーソンの「沈黙」のなかにそうした私的な動機がひそんでいたことは、これまでの検討から考えて、まず

間違いないだろう。だとすると、ここでは、「表現」は「沈黙」にたいして、指示機能を欠いた暗喩とでも言うべき逆説的な位相をしか占めていない。

このような「表現」と「沈黙」のねじれた関係は文体にのみ表われるものではないだろう。ホーソンはこの「灰色の戦士」という作品を第一短篇集『トワイヌ・トゥルド・テイルズ』の巻頭に置いたが、それはなぜだったろうか。それについてホーソンは楽屋話めいた話をなにも残しておらず、したがってホーソンの真意を判然と知ることはいできない。だが、作品集の作品配列に作家の意図や主張が籠められているのは言うまでもないことで、それを作家の「表現」の一部と見做すことは許される。そして、『トワイヌ・トゥルド・テイルズ』の作品配列をホーソンの「表現」と見た場合、そこに意外な「沈黙」の作為が籠められているということもあり得ないことではないだろう。

すでに見てきたように「灰色の戦士」にはニコラス・マニングの視えない影が濃く差していた。また、前述の「知事官邸の伝説」はニコラス・マニングが組した王党派の没落を扱っており、物語の舞台となる官邸の定礎の年は、マニング家のアメリカ初年に当たっていた。そして「灰色の戦士」に登場する王党派の人物たち——アンドロス、ジョゼフ、ダッドリー、ブリバント博士、ランドルフ——のすべてが、なんらかの形で「知事官邸の伝説」に再登場し、凋落を託つかのように闇の中に消えていく。その意味で、この二作は、王党派の栄華と没落の転末譚として、互いに呼応しあっていると読むことができる。この「マニング家」と密接に係わる二つの作品が、第一短篇集の第一部と第二部の冒頭に配されているのは偶然だろうか。ホーソンが『トワイヌ・トゥルド・テイルズ』の出版を「世間との交渉を始める試み」と呼んだことはよく知られているが、世間に対していわば名告りをあげようとしていたその機会に、裁く者としての「ホーソン家」の血筋をひいているばかりでなく、裁かれる者としての「マニング家」の末裔でもあるという自己のアイデンティティを、この作品配列のなかに、ホーソンが無言のうちに忍ばせたということは考えられないだろうか。私には、小心翼翼としてかつ誠実なホーソンの自己紹介の忍びやかな声が聞こえてくるように感ぜられるのだが。

注

- 一 サムエル・モリソン『アメリカの歴史』全三巻西川正身訳（集英社）一卷八九頁。
- 二 *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Univ. Press, 1962-85), vol. 11, p. 9. 各論考中に括弧をくわけて挿入されたローマ数字と和数字は、すべてこの没後百年版全集の巻数と頁数を示す。
- 三 G. Harrison Orians, "The Angel of Hadley in Fiction: A study of the Sources of the Sources of Hawthorne's 'The gray Champi on'" (*American Literature*, 1932) vol. 4, pp. 257-69.
- 四 Thomas Hutchinson, *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay*, ed. Lawrence Shaw Mayo (Cambridge, Mass., 1936), vol. 1, p. 189. Cited in N. Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (Duke Univ. Press, 1972), p. 88.
- 五 Randall Stuart, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (Archon Books, 1970), p. 41.
- 六 Vernon Loggins, *The Hawthornes* (Columbia Univ. Press, 1951), p. 86.
- 七 N. F. Doubleday, *op. cit.* p. 86
- 八 O・W・ホームズの評語。
- 九 cf. N.F. Doubleday, *op. cit.* pp. 85-92. ダブルディは、「灰色の戦士」ととりわけ文学理論の要請に従順に従った作品と見ており、「この作品はホーンソンの精神や心理傾向の多くを読み取ろうとすることは、ホーンソンがその中で作品を書いた伝統を無視し、ホーンソンを促してそれに準じた作品を書くようにさせた数多くの愛国的な文学論を無視することになる」と断っている。私がダブルディと見解を異にすることは、拙論自体が明らかにするだろう。
- 十 Kenneth Dauber, *Rediscovering Hawthorne* (Princeton Univ. Press, 1977), pp. 53-56.
- 十一 cf. V. Loggins, *op. cit.* pp. 87-95. Philip Young, *Hawthorne's Secret: An Un-Told Tale* (David R. Godine, 1984), pp. 118-21, pp. 125-34 *passim*. 以下のニコラスの経歴については、両書を参考とした。
- 十二 cf. N.F. Doubleday, *op. cit.* p. 89.
- 十三 ホーンソンと近親相姦の關係については拙論「誰が『父親』を殺したのか」(一)(二)(三)（光華女子大学『英米文学』一九八五、一九八六、一九八七）参照。
- 十四 V. Loggins, *op. cit.* p. 88.

- 十五 *ibid.* p.89.
- 十六 *ibid.* p.110.
- 十七 『緋文字』の序文「税関」のなかの言葉。cf. *Centenary Edition*, vol. 1, p.9.
- 十八 同じく「税関」のなかの言葉。 *Centenary Edition*, vol. 1, pp.9-10.
- 十九 P. Young, *op.cit.* p.129.
- 二〇 前記ドーバーも同じ意見で、△灰色の戦士△が、ホーソンの同時代に対する異和感を象徴していると考えているのは興味  
 である。
- 二十一 cf. "Dr. Bullivant" (*The Complete Writings of Nathaniel Hawthorne: Autography Edition*, Riverside Press, 1900), vol. 17, pp. 268-280. この十頁余りの小品は、大半がビュリタンの社会の分析と、フリバントの投獄された牢屋の描写で成り立っていて、フリバントの性格については殆ど描かれていないという奇妙な作品である。おそらくホーソンは、同じ事件で同じ監獄に入れられていたニコラス・マニングを念頭においてこれを書いている。この作品が没後百年版全集に採録されていないのは残念なことだ。
- 二十二 *ibid.*, p.272.
- 二十三 *ibid.*, p.273.
- 二十四 *ibid.*, p.275.
- 二十五 *ibid.*, p.274.
- 二十六 F・クルースの言葉。ホーソンの歴史物語の本質を洞察した卓見であるように筆者には思われる。cf. Frederick Crews, *The Sins of the Fathers*, (Oxford Univ. Press, 1966), Chapter II.
- 二十七 Young, *op.cit.* p.122.